連載（中）　進む高齢化、増える業務量　　病院収支にも影響

佐渡島の海の玄関口・両津港の近くに、両津病院はある

新潟・佐渡の医療危機

島内をタクシーで移動していると、初老の男性運転手が言った。「佐渡は食べ物も豊かで、年寄りには悪くないところだが、若者には刺激がない。島を出て行った若い人たちは帰ってこない。人口がどんどん減っている」

佐渡市の人口は約4万7000人。3月末時点の高齢化率は43.3％で、日本全体より14ポイント程度高い。20年前の2005年と比べると、人口は約2万人減った一方で、高齢化率は8ポイント以上、上昇した。

人口減と歩調を合わせるように、医療機関も減った。新潟県の福祉保健年報によると、03年の佐渡島には病院6施設、一般診療所51施設、歯科診療所27施設があった。20年後の23年には、病院2施設、一般診38施設、歯科診19施設に縮小している。

一般診の医師の高齢化も課題だ。今後、診療所の数が減れば、病診連携の在り方にも影を落とす。

両津病院の現状について語った石塚院長

●入院患者、7割は後期高齢者

島にある2つの病院は、厚生連・佐渡総合病院と、佐渡市立両津病院。両津は回復期、在宅復帰支援といった役割を担い、基幹病院の佐渡総合を支えている。

両津の石塚修院長は、佐渡の医療機関間の協力はうまくいっていると説明する。「それぞれ張り合うことはない。各医療機関が力を合わせなければ（医療インフラが）全滅する可能性がある」。

両津の病床数は60床。10対1看護の一般病床が12床、地域包括ケア病床が48床だ。入院患者のうち、75歳以上の後期高齢者が占める割合は7割程度。内科に限れば8割程度となる。90歳以上も多く、レセプト上では、肺炎、尿路感染、呼吸不全といった疾病が上位に来る。

いったん入院した高齢者を在宅・施設に移すには、リハビリテーション、関係者間の相談を含めて、相当の時間・労力を要する。このため石塚院長は、復帰支援を考慮した地ケア病床の存在は「助かっている」と評価する。一方で、「報酬点数はもう少しどうにかならないか」と改善を期待する。

●見合うだけの診療報酬「付いていない」

佐渡総合も、入院は高齢患者が多い。佐藤賢治院長は、復帰支援、転倒防止などを例に挙げ、「患者の高齢化は病院の業務量を増やす」と指摘した。さらに、高齢患者が多くなれば、手術の回避などで診療報酬は減少する傾向にあると説明。「見合うだけの診療報酬を付けられているかというと、付けられていない」と嘆く。

病院経営が厳しくなっている背景として、昨今の物価高や人件費上昇のほか、医療の控除対象外消費税問題、高額機器の更新問題などにも言及した。「通常の診療を一生懸命やっていて、赤字になるなんておかしい」と力を込めた。